

書評：浙江省文物考古研究所. 2003. 河姆渡—新石器時代遺址考古發掘報告. 上 (513 pp.) + 下 (208 図版). ISBN 7-5010-1452-3. 文物出版社, 北京. 価格 500 元.

待望の報告書がついに出了。昨年の秋、浙江省の文物考古研究所を訪れたとき、丁度出版されたというので早速買い求めた。私は考古学には疎いので、この報告書の中から植物に関する内容を拾い上げて紹介しよう。

上巻が本文編、下巻が写真図版編で、上巻には前言に続き、第1章は遺跡の地理的位置と発掘の経緯、第2章は層序区部と下から上へ四つの文化期に相当する4つの層の概略、そして第3章から第6章までが第一文化期から第四文化期までの遺構、遺物、第7章が結語で、その後に付表に続き、10編からなる「附録」があり、最後に英文、和文の要旨が載っている。

本書の附録がわが国でも我々の書いたものが「付編」として後ろに付け足されるのと同じで、我々にとっては興味が一番あるところである。附録の第1編は放射性炭素年代の測定結果で、北京大学考古学系の放射性炭素実験室など中国国内の4つの実験室での27サンプルの測定結果が載っている。ただここに載っている結果と第七章、結語のなかの「二、年代」(369～370ページ)に載っているBP値が随分と異なっていて、それらが互いにどういう関係なのか、中国語が読めない私にはよく分からない。ともかく、BP7000～5300年の間に4つの文化層があり、最も古い第一文化期(BP7000～6500年)では最も遺物の保存状態が良く、栽培イネ、野性イネを始め多くの遺物を包含し、また、高床式ロングハウスなどもあって、いわゆる「河姆渡遺跡」を代表している、ということのようだ。附録の4編はイネに関する報文で佐藤洋一郎氏も共著者に入っているものもある。その他、古人骨、土器、縄の素材などに関する報文があり、最期に文献リストがあるが、我々に一番興味があるのは附録9の花粉分析結果で、中国科学院植物研究所の孫、杜、陳の「河姆渡先民生活時期的植被、古気候」(456～468ページ)と題する報文であろう。この報文には第1層から第4層までの18点の試料の結果が表1に示されているが、我々に馴染みの深い、いわゆる花粉ダイアグラム、と言うものはなく、また、比率の表示が、孢子まで含めての百分率になっているので、なかなか難解である。とにかく、イネの花粉が高率で出現するが、樹木に

注目すると、1) 33の分類群(*Tricolporopollenites* と言うのを除く)が上がっていて、針葉樹はマツ属のみで、その比率は0.3～4.3%で特に高い層準(試料)というものはない、2) 全体を通して比率が高いのはコナラ属、タイワンフウ *Liquidambar formosana*, シイ属、ニレ属、クマシデ属くらいのものである、3) 他にハンノキ属、カエデ属、カバノキ属など馴染みが深いものが多いが、マンサク科の *Altingia* やクルミ科の *Engelhardtia* など、南方系のももあり、これらの結果を総合して「亜熱帯常緑落葉闊葉樹林」であったとしている。花粉の顕微鏡写真も載っているがそのクオリティは不満足なのは言うまでもないが、もう1、2段高い分析精度が欲しかったと言うのは私1人ではないだろう。

河姆渡遺跡は米の大量出土がいちばんの特徴だが、他の大型植物遺体も出土している。栽培植物としてはヒョウタンがあり、野性のものではドングリ類(*Quercus gilva* の名が上がっている)、チャンチンモドキ、ヒシ属、オニバスなど多くの種類が報告されている。

紹介者の個人的な興味は勿論木材だが、高床式ロングハウスや井戸などの膨大な遺構材、木胎漆器を始め、器柄、矛、棍などの区分で多数の木器が報告されているが、その樹種についての記述は断片的である。第一文化期の木器の項(128ページ)には林業科学研究院の研究所で鑑定してもらったところ、25点中20点が円柏(= *Sabina* (= *Juniperus*)), 3点がコナラ属、それにクスノキ属とトネリコ属が1点ずつという結果が載っているが、調べられた点数自体が出土木材量に比べて随分少ないし、この結果も根拠を示すものが一切無いので、どうにも評価のしようがない。勿論何の器種に何の材をと言う話しには全くならない。

何れにしてもこの「極めて重要な大遺跡」の報告書が出たことはたいへんありがたいことで、わが国の先史時代の植生と植物利用史を研究するものにとっては、浙江省の考古学研究所に、これをスタートに、河姆渡遺跡の、更に広範で、より精査な植物考古学的研究を展開されることを切望するものである。

(鈴木三男)